

巻頭言

どんな人物も最初から偉大であったわけではない

学長 蟹瀬誠一

「わずか 4 歳で貧困のどん底に突き落とされ、9 歳で働き始め、30 歳になるまでに家族全員を失った。やがて生まれたばかりの息子と死別し、そして大恐慌、第二次世界大戦がたたみかけるように彼の身に降りかかった……。逆境は不安を高め、常に危機感を抱かせ、自己満足を遠ざけた。悲劇続きの人生は、自分は失敗を越えて生き残れる、だからリスクに臨むことができると彼に教えた。」

これはハーバード・ビジネス・スクールでリーダーシップ論を担当したジョン・P. コッター教授が松下幸之助の起業家精神の軌跡を辿った名著“MATSUSHITA LEADERSHIP”（1997 年、金井壽宏＝監訳 高橋啓＝訳 ダイアモンド社）の中の一節である。

現代社会においてアントレプレナーシップはますます重要な役割を果たしている。急速に変化する経済環境や技術革新の中で、新しいビジネスモデルや革新的なアイデアを生み出す力は社会全体の発展に不可欠だからだ。しかし科学的合理主義が優勢の世界にあって、イノベーションを推進し可能性の限界を広げるのは人間の忍耐力と情熱、そして閃きであることを忘れてはいけない。

第 12 号となる研究論文集「SBI 大学院大学紀要」では、「アントレプレナーシップ～軌跡・課題・展望～」を統一テーマに、本学の専任教員を中心とした執筆陣がアントレプレナーシップについて各々の視点から興味深い考察をしている。

アントレプレナーシップの歴史は古く、商業活動が始まった時代から存在していた。しかし、広く知られるようになったのは経済学者ヨーゼフ・シュンペーターが起業家を「創造的破壊」を行う人物と定義した頃からだった。

現代のアントレプレナーシップはとくに 20 世紀後半から 21 世紀にかけてさらに大きな進化を遂げている。インターネットの普及やグローバル化の進展により、起業のハードルが下がり、多くの人々が新しいビジネスを立ち上げる機会を得られるようになったからだ。Apple を創業しパソコンやスマートフォンで革命を起こしたスティーブ・ジョブズや、テスラやスペース X を立ちあげたイーロン・マスクなどがその顕著な例だろう。

SBI 大学院大学も、こうした時代の流れに対応し、単に起業家を育成するだけでなく、実践的な教育プログラムを通して変化の激しい社会で自らの課題を見つけ解決に向けて行動できる力を養う教育を目指している。

しかし、アントレプレナーシップを発揮するにはまだまだ多くの課題が存在しているのも現実

巻頭言

だ。まず資金調達の難しさ。とくに、初期段階のスタートアップにとっては、十分な資金を確保することが大きな壁となっている。また、技術革新のスピードが速く、常に最新の情報やスキルを習得し続ける必要がある。さらにはグローバルな競争が激化している中で独自性や競争力を維持することも重要だ。

そんな中、注目を集めているのが AI（人工知能）の進化である。アントレプレナーシップにもすでに大きな影響を与えている。なぜなら AI はデータ分析や市場予測を迅速かつ正確に行う能力を持ち、起業家がより効果的なビジネス戦略を立てるのに役立つ。また、自動化技術を通じて業務効率を大幅に向上させ、リソースの最適化を図ることもできるからだ。これにより、起業家はより創造的な仕事に集中することが可能になった。

ただ、困ったことに日本は他の先進国と比べ著しく起業家が少ない。その理由のひとつは失敗に対する恐怖心が強いことだ。国際的起業家調査（GEM＝グローバル・アントレプレナーシップ・モニター）が 2009 年に先進諸国 20 カ国で行った調査で、起業失敗に対する恐怖心が最も大きかったのは日本人だった。2013 年の世界銀行のデータでも、日本の年間起業率は OECD 諸国で最下位だ。

背景には、アントレプレナーシップ教育と意識の不足、資金調達の難しさ、企業に関する規制や手続きの複雑さ、さらには起業家を支援するためのネットワークやメンターシップの不備などがあるとされる。ちなみに、デンマークではオンラインで会社登録すれば、わずか 1 日で起業することが可能だ。

だが根本的な原因は、日本人が失敗を「自分に才能がないから」と受け止める「固定型マインドセット」にあるのではないか。失敗を恐れず根気よく続ければ不可能なことはないという松下幸之助型のチャレンジ精神が失われてしまっている。歴史を振り返り失敗があったからこそ成功が生まれたのだということを改めて思い返そう。

アントレプレナーシップはこれからもさらに多様化し、進化していくだろう。とくに、AI やブロックチェーンなどの新技術がビジネスの在り方を大きく変える可能性が高い。社会的課題の解決を目指すソーシャルアントレプレナーシップも増えるだろう。

SBI 大学院大学は、そのような未来の変化に対応できる情熱溢れる人材を育成するため教育カリキュラムの充実を図り、実践的な経験を積む機会を提供していくことによって社会に貢献していきたい。